

はじめに

江戸・東京の歴史資料は、火事や水害、震災や戦災によって数多くが失われたといわれる。日本橋の人々の暮らしを知る史料についても多くが失われてしまった。しかし、江戸の研究の発展に一筋の光を与える古文書が存在する。へにんべん〉の屋号で知られる高津伊兵衛家の古文書である。时期的には、享保改革期から宝暦・明和・安永・天明期、寛政改革期を経て文化期に至る文書である。この時期の江戸日本橋商人・町人の暮らしを知る史料は極めて少なく、しかも今日、このように一つの家の文書として残されているのは稀であるときさえいえる。

本書は、この江戸日本橋の鯉節商人であった高津伊兵衛家に残された古文書を翻刻した。これによって江戸の人々の暮らしや商業が少しでも解明できればよいと考えた。掲載した文書は、次の通りである。

高津幸通日記

正徳四年七月十五日〜寛政三年十二月大晦日

追遠訓

明和元年七月十五日

吉右衛門殿宛高津伊兵衛幸通書状

安永二年九月十六日

遺囑

安永三年七月十五日 安永六年正月十六日改正

福壽録

安永四年二月望日

無言語

安永六年四月十日 安永八年四月十七日

高津伊七日記

寛政四年正月元日 文化九年十一月四日

高津家姓系図

平成十一年三月十七日

高津伊兵衛家の初代伊之助は、元禄四年（二六九二）、日本橋小舟町一丁目の雑穀商に年季奉公するために江戸にやって来た。伊勢国桑名郡四日市宿高津与次兵衛の次男であった。奉公を終えた二十一歳の伊之助は、元禄十二年（二六九九）、日本橋南詰青物町で売場と営業権を借りて塩干魚を商った。現在でもへにんべん〉は、この年を創業元年として

いる。次いで伊之助は、諱を佐幸と称し、宝永元年（一七〇四）、小舟町三丁目に土地を借り、この借地にある店と建物を買って鯉節問屋を開いた。翌年、加賀藩の干魚御用の権利を得て伊勢屋伊兵衛と名乗った。

二代目の佐敬は、享保十四年（一七二九）四月、父佐幸の死去によって家督を相続して二代目の伊兵衛を継いだ。家業に尽力したが、若くして病に倒れ、三十八歳で病没した。

三代目は、佐敬の二歳年下の弟で、諱を幸通と言った。寛延二年（一七四九）八月、兄の死によって家督を継いだ。家業に意を注いで熱心に働き、兄から受け取った資産を大きく増やして高津家の繁栄の基礎をつくった。また、七歳の享保五年八月から塾に通って儒教の手ほどきを受けた。幸通は生涯にわたって自己の存在証明を儒教的な倫理思想のなかから考えようとした。今回、掲載した文書はほとんどが幸通の書いた記録である。詳細については、本書所収の史料解題に譲るが、少しだけ説明すると次の通りである。

「高津幸通日記」であるが、これには幸通が自分で書いた「日記序」という序文がある。父と兄とが築いた家業を守り発展させたい。このため日々の出来事を日記として記録し、自省の糧としたいとある。記事は、幸通が生まれた正徳四年（一七二四）七月から始まり、死去の約四年前の安永四年五月まで書かれている。内容は、兄の佐敬が病気になるまで幸通が仕事を手伝うようになると次第に多くなり、幸通が家業を継ぐと精緻になっていく。

「追遠訓」は、子孫が先祖の徳を追慕するという意味である。幸通が、江戸の高津家の礎になった先祖の業績を子々孫々まで伝えようとした文書である。今日でいう家族的な意味合いも持っている。

「吉右衛門殿宛高津伊兵衛幸通書状」は、幸通が上方に派遣した「吉右衛門」との鯉節の仕入に関する遣り取りを示す文書である。鯉節の価値が食品市場の中で高まっていく様子、銭相場の変動と鯉節取引との実態を垣間見ることができらる。

「遺囑」というのは、死後の事を依頼するという意味である。ここでは、残された家族が、葬儀や追善供養で儀式としてなすべき事、幸通没後の火災・盗難などの対策、奉公人の待遇などが細かに提示されていて興味深い。

「福壽録」は、商人として豊かに長く生きるにはどうしたらよいかという幸通の心得を子孫に書き残した書である。

「無言語」は、病に倒れた幸通が、死に至る自分の心情を吐露した書である。幸通の死去は安永八年四月十七日なので、その約二年前に書かれた。生と死は昼夜の交替や季節によって寒暑が繰り返されるようなもので自然に任せるしかないと述べている。

「高津伊七日記」は四代目当主である伊七の日記である。記録期間は、寛政四年（二七九二）正月元日から文化九年（一八二二）十一月四日までである。伊七は、このほかに幸通の死後、「高津幸通日記」を書き継いでいる。その期間は、安永五年（二七七六）十月十六日から寛政三年十二月大晦日までの約十五年間である。

最後に収載した、「高津家姓系図」は、平成二十六年（二〇一四）二月五日に逝去された第十二代当主の高津伊兵衛明義氏が作成した系図である。十二代当主がみずから作った貴重な史料なのでこれは活字にせず影写版として掲載した。これによって高津家歴代当主の概要を知ることができる。

これらの文書で江戸日本橋社会の実像をどのように復元できるのか、期待は膨らむばかりである。最後に、今回の資料調査に御協力された今は亡き十二代高津伊兵衛明義氏、貴重な資料の公開を御許可いただいた株式会社りんべん社長・第十三代高津伊兵衛克幸氏に深甚の謝意を申し上げたい。

澤登寛聡

SAMPLE

目次

口絵

はじめに.....澤登寛聡 1

【史料解題】

高津幸通日記.....澤登寛聡 一
筑後 則一

追遠訓.....四

吉右衛門殿宛高津伊兵衛幸通書状.....五

遺囑.....六

福壽録.....六

無言語.....八

高津伊七日記.....九

高津家姓系図.....一〇



【翻刻】……………一

高津幸通日記……………一三

追遠訓……………一四九

吉右衛門殿宛高津伊兵衛幸通書状……………一七五

遺囑……………一八一

福壽録……………一九一

無言語……………二〇五

高津伊七日記……………二二五

高津家姓系図(影印)……………二六一

【解説】……………筑後 則二七一

鯉節商伊勢屋伊兵衛三代の記……………二七三

高津伊兵衛の歴代……………二九一

高津幸通日記 日記序 通釈……………二九五

福壽録 通釈……………三〇五

無言語 通釈……………三一九

あしがき……………澤登寛聡三三五